

貞慶と宗性の地蔵菩薩信仰

——『地蔵講式』と『地蔵菩薩感應抄』との比較を通して——

浅井尚希

一、はじめに

南都仏教は、黒田俊雄の枠組みでは顯密仏教に属し、その中から改革派が誕生した。貞慶（一一五五—一二二三）等は仏道実践の一環として革新的な教学研鑽を進めていった人物であるが、彼らは自らの属する宗以外と相互交流し、いわゆる「顯密僧」となっていた。このような互いの宗義を学び合う八宗兼学の状況において、革新的な教学研鑽をなせ行えたのか。一つには法会による他宗・他寺院との交流という観点が挙げられる。当時行われていた北京三会・南京三会といった公的な法会や、悔過会・論義会といった各種法会での他宗との交流が大きな要因の一つであったと考えられる。今一つは師弟間における思想の継承及び変化があったのではないだろうか。例えば、唐招提寺中興の祖と言われる盛（一一九四—一二四九）は青年期に、戒律の復興者といわれる貞慶の造った常喜院で学んでいた。貞慶と覚盛との戒律観には大きな隔たりがあり、一概に貞慶と覚盛とをつなぐことはできない。⁽¹⁾ その一方で、貞慶の法孫にあたる良遍（一一九四—一一五二）は、貞慶の思想を継承して三無性門の立場から一乗思想との融合を図っている。⁽²⁾ また、貞慶の弟子の覚真（一一七〇—一二四三）にいたっては、貞慶の観音信仰を忠実に守ろうとした。⁽³⁾ このように、南都仏教の僧侶たちは伝統教学や師匠の教えを継承している部分と自ら革新していく部分の両方を持ち合わせていたのである。その際、注目すべき史料の一つが「感應抄」と題された一連の書物であった。

「感応抄」は、師の思想を継承しつつも、自らの信仰を吐露する書として注目される史料である。初めに「感応抄」に言及したのは、平岡定海氏である。平岡氏は宗性（一二〇二—一二七八）の『弥勒如来感応抄』を翻刻し、宗性の弥勒信仰が貞慶の弟子覚遍（？—一九九—一二五八）から伝わったものであると示した。⁽⁴⁾その後、阿部泰郎氏によって弁暁（一一三九—一二〇二）の『八幡大菩薩并心経感応抄』が翻刻された。⁽⁵⁾そんな中、新倉和文氏によって、貞慶撰『観世音菩薩感応抄』が翻刻され、これまでの『弥勒如来感応抄』・『八幡大菩薩并心経感応抄』とともに、「感応抄」が自らの信仰を述べた書物であることが示された。⁽⁶⁾しかし、現存する「感応抄」の中でいまだに翻刻・公開がなされていないものに宗性撰『地藏菩薩感応抄』（二三—三）（東大寺図書館の所蔵番号／以下同様）がある。⁽⁷⁾

周知の通り、平岡氏によって宗性の中心的な信仰は弥勒信仰にあったことが示されているが、⁽⁸⁾『地藏菩薩感応抄』は『弥勒如来感応抄』の制作中に作られたものであり、宗性にとつての地藏信仰はどういった意味をもったものであったかを検討する好史料である。一方、師である貞慶は地藏に関する「感応抄」を制作していないが、貞慶の地藏信仰を語った『地藏講式』が残されている。よって、『地藏講式』と『地藏菩薩感応抄』を中心に比較することで、宗性は貞慶の地藏による救済論を展開させ、地藏の理観による名号と懺悔による救済を説いているのである。最終的には弥勒の導きによって兜率往生を願うが、その前提として六道輪廻を抜け出さなくてはならない。その時に宗性が頼りにしていたのが地藏であったといつてよいのである。

二、貞慶の地藏信仰

貞慶の地藏信仰を直接知る資料に『地藏講式』が挙げられる。貞慶撰『地藏講式』は平雅行氏が見出し、活字化している。⁽⁹⁾貞慶の地藏信仰を直接に書いた書物は管見の限りこれ以外にはない。ただし、講式を扱う際には注意が必要とされる。なぜなら講式は法会の表白等に相当するため、その法会の依頼者から作成を頼まれる場合もあるという特性上、講式には依頼者の意図が介在した外的要因と貞慶自身の信仰という内的要因の二面性があるからである。⁽¹⁰⁾しかし、依頼者の意図など関係ない貞慶自身の教義書である『唯識論尋思鈔』（以下『尋思鈔』）を補助的に用いることで、貞慶の内的な地藏信仰を検討することは可能である。これらの資料によれば、貞慶にとつての地藏は自らの修道への加護を願う大悲

闡提として位置づけられていたといつてよい。すなわち、『地蔵講式』第三段には以下のように述べられている。

凡菩薩意樂雖^レ區、未^ニ必發^ニ闡提之悲願^一、闡提菩薩雖^レ多、未^ニ必先^ニ惡趣之濟度^一、地蔵薩埵本誓獨以如^レ此^①

一切の衆生を救い尽くすまで仏にならないとの尽衆生界願を立てた菩薩を大悲闡提菩薩というが、右の文では「その中でも惡趣の衆生をまず救うのは地蔵だけである」と記されているのである。その地蔵の「大悲」について、貞慶はさらに『地蔵講式』第四段において次のように述べる。

地蔵一人之功德、何可^レ勝^ニ彼恒沙大士^一事是難^レ信、雖^レ懷^ニ疑惑^一、(中略)大悲何雖^ニ大悲^一、穢惡利生之大悲猶勝^レ余、發心誰雖^ニ發心^一、釈尊最初之發心獨超^レ他、地蔵已^ニ學^ニ世尊之誓願^一、功德豈同^ニ汎爾之菩薩^一^②

と。すなわち、地蔵の功德が他の大士(菩薩)に勝っているとは信じがたいとまず「疑」を示した上で、「釈尊の誓願を学び実践してきた地蔵の穢惡利生の大悲が余の菩薩に比して勝れている」と論ずるのである。これを見ると、貞慶において地蔵は穢惡の者を助けることにおいて、他に比して、その優位性を認めていたことが知られる。その結果、『地蔵講式』第五段では、以下のように地蔵に願うのである。

若墮^ニ三途之苦難^一、助^レ之爲^ニ善趣之依身^一、若着^ニ人天之欲境^一、導^レ之勸^ニ出離之要門^一、又加^ニ護我等^一、如^レ影隨逐、臨終正念往^ニ生淨國^一、見仏聞法住^ニ不退位^一、共^ニ諸衆生^一同^ニ証菩提^一^③

と。すなわち、「三途(餓鬼・畜生・地獄)に墜ちたならば助けて善趣の身となし、人天の欲界に生まれたならば出離の要門を勧め導き、我らを加護して影の如く寄り添い、臨終時には正念に住せしめて淨土へ往生させ^④、見仏聞法して不退転に住せしめ、ついには衆生と共に菩提を証すること」を地蔵に願っていることが知られる。ここで注目すべきは、地蔵が行者の仏道成就を「加護」する存在として位置づけられている点で

ある。これについて、貞慶撰『尋思鈔』の「代諸有情」の段には、次のように記されている。

問。菩薩有^ハ自在力^リ。以^テ化^ス現身^ヲ所^レ化^{スル}事、皆如^シ実身^ニ。即^チ八地已上^ノ變易身^ノ菩薩、有^リ代受苦相^ニ。〈如^シ觀音地藏等^ノ〉等也。設雖^モ分段身^ト於^テ地上^ニ者、亦以^テ化身^ヲ可^シ許^ス此^ノ義^ヲ。
答^ハ（中略）於^テ八地已上^ニ者、心中念力与^ハ七地已前^ノ無^シ異^{ナリ}。其時不^レ願^ニ自位^ヲ不^レ思^ハ我^レ為^ル變易身^ト也。〈其心切^{ナル}時不^レ及^バ余思惟^ニ設雖^モ大聖^ト当^ニ皆如^レ此^{（15）}〉

と。すなわち、八地以降の菩薩であつても慈悲力によつて分段身にとどまつて受苦の相を示す大悲闍提菩薩の一尊として地藏の存在が示されているのである。また、貞慶撰『觀世音菩薩感應抄』「帰依因縁」の段では、

又旧住^ニ娑婆^ニ諸大菩薩本願勝^レ他、永受^ニ十惡之塵^ニ大悲重、心常救^ニ五濁之鱗^ニ。其^レ牀所謂觀音・地藏・文殊・藥王土^{（是也）}者、其中至^ニ觀音大士^ニ者娑婆世界之中独号^ニ施无畏^ニ者^{（16）}。

といい、五濁の衆生を助ける大悲深重の尊者の一尊として地藏の名をあげている。ここで注目したいのは、觀音・地藏・文殊・藥王といった娑婆有縁の尊者がいるなかで特に觀音のみが娑婆世界の施無畏者と呼ぶにふさわしいとしながらも、『觀世音菩薩感應抄』「当來值遇」の段に至つては、

我師觀音受^ニ持大成^ニ亦可^レ如^レ彼。後々昇進漸々增長者業障至^レ重機為^レ猶淺。順次生中不堪^ニ值遇^ニ。三惡道底雖^ニ沈重^レ苦乞願大聖猶垂^ニ加被^{（17）}。冥官責^レ我之詞觀音加^ニ其詞^{（17）}。

と述べ、その観音でさえも加被（加護）を与える存在にすぎないとしている点である。加被とは仏・菩薩が行者の修行等を資助するために加える慈悲による力であるが、あくまでも行者の自力に加えるのであって、絶対他力のように自力を捨ててを前提とはしていない。管見の限り、地蔵に関する加被力・他力の記載はないものの、娑婆世界で一番「施無畏者」と呼ぶにふさわしいと貞慶が考えていた観音でさえも絶対他力ではなく加被力のレベルであつた点に注目すべきであろう。⁽¹⁸⁾

ではなぜ、貞慶は仏道成就の加被を地蔵に求めたのであろうか。この点について『地蔵講式』序には、以下のように記されている。

三世因果一無所覺、然間煩惱者繁更猛、多萌定業。於頼耶之底、善根者希、又弱、猶隔行願於真実之道。安養知足之仏土、順次之望甚難、三途八難之苦域、倒懸之責何爲⁽¹⁹⁾

と。傍線部において貞慶は、「阿頼耶識に善の種子（善根）を熏習することは稀で弱く、行願と仏道には隔たりがあり、安養（極楽浄土）や知足天（兜率浄土）に次の生で行くことは難しく、三途八難の苦の世界に堕ちてしまうからである」と凡夫のあり方を示している。このような愚かな凡夫であるからこそ、貞慶は三途八難の苦を救う地蔵の加被をまず願ったと考えられるのである。

かくして、貞慶は地獄に堕ちた後の救済を行う菩薩として地蔵を位置づけたわけであるが、その具体的な加被としては地獄での代受苦および閻魔庁での弁護を示した。これについて『地蔵講式』（第三段）には、次のように述べられている。

当初於閻王庁庭、欲救簡州侍郎之日、法王退之以因果理、菩薩告曰、我昔於一切利天、得釈迦大師附屬、能救定業衆生、豈捨侍郎哉、法王于時拜謝而言、大士志願堅固不動如金剛山、須放還人間、嗚呼、誓願之如金剛、非只破妄業之理、大悲屠心肝、有自代那落之苦、若結一線於此菩薩之者、敢勿恐後生之苦患⁽²⁰⁾矣。

と。悪業の定まった苦の衆生を救いたいという地蔵の悲願によって閻魔庁に堕ちた簡州の侍郎は救われる。この話は『地蔵菩薩応驗記』第十一

話に同様の話が掲載されているが、ここで貞慶は閻魔庁において地藏菩薩が簡州の侍郎のために弁護を行い、那落（地獄）の苦を代わりに受けたことを指摘し、このような地藏菩薩の大慈悲が向けられている以上、後生の苦患を恐れる必要はないと論じているのである。また、地藏が五濁惡時の無仏世界の導師として化導する尊者であることも合わせて指摘している。すなわち、『地藏講式』（第二段）において、

十輪經云、有菩薩摩訶薩、名曰「地藏」、已於無量無數大劫、五濁惡時無仏世界、成「熟有情」文、一切大願之中、此願尤至要也、（中略）況於「無聞非法之輩」、聖教滅盡之期哉、大聖悲願寧不「顧」此時「哉」、利益之新世也、末代始過「上代」、感応之滿眼也、惡人還超「善人」。

とあるように、『大乘大集地藏十輪經』に出る「地藏菩薩は五濁惡時の無仏世界において有情（輪廻する存在）を成熟させることを願った尊者である」という文を引用し、「この願いこそ一切の大願の中で最も大切な願である」と指摘している。注目すべきは、この願いが聖教滅盡の時の無聞非法の惡人にとって最も大切なものであるとして、善人よりも惡人が優先されるという見解が示されている点にある。これは法然・親鸞等において論じられた「惡人正機」の見解に類似したものであり、貞慶にも自己を含む惡人救済論の視点のあったことが窺えるのである。このような惡人救済の理論は、明らかに「五濁惡時無仏世界」において有情を教化し成熟させる「大聖地藏の悲願」にあると見たのが貞慶の基本姿勢であったといつてよいのである。

三、『地藏菩薩感応抄』の特徴

現在、古代・中世において、「感応抄」名を題とするものには以下のものがある。翻刻等の研究状況も加味して記すと、およそ次のようになる。

①著者不明『佚名諸菩薩感応抄』…後藤・箕浦氏によって翻刻済み文殊・觀音などの諸菩薩の經典と日本と中国の感応靈驗説話を引用

②宗性撰『弥勒如来感応抄』…平岡定海氏によって『弥勒如来感応抄』を翻刻宗性の弥勒信仰は貞慶の弟子覚遍から伝わったものであると

示した。

③弁曉作『八幡大菩薩并心経感応抄』…阿部泰郎氏によって弁曉の『八幡大菩薩并心経感応抄』が翻刻。⁽²⁵⁾

④貞慶撰『観世音菩薩感応抄』…新倉和文氏によって翻刻の後、改定版が楠淳證氏によって刊行される。⁽²⁶⁾

⑤宗性撰『地藏菩薩感応抄』…現在も未翻刻。

『佚名諸菩薩感応抄』は作者・著作年代が不明のため、他の「感応抄」との関係は不明であるが、『佚名諸菩薩感応抄』以外の感応抄題の各文書は、建久八年（一九九九）～文応元年（一二六〇）の間に弁曉・貞慶・宗性によって書かれている。しかも、弁曉と貞慶は宗性の師・祖父師にある。周知の通り、平岡氏によって宗性の中心的な信仰は貞慶から受け継いだ弥勒信仰にあったことが示されているが、『弥勒如来感応抄』の制作中に作られた『地藏菩薩感応抄』への分析は行われていない。はたして、弥勒信仰を中心としていた宗性にとっての地藏信仰はどういった意味をもったものであったのか。このことを検討する好史料が、『地藏菩薩感応抄』であったといつてよい。

まず、『地藏菩薩感応抄』に関しては、東大寺図書館所蔵の冊子本のみが現存しており、平岡氏によって奥書のみが以下のように翻刻されている。

建長五年三月二日未時於東大寺尊勝院中堂正面、申出光明院上綱覚^通之御自筆草本馳筆畢。

抑宗性重病未及平癒、身心頗雖微劣、空依暮春日、聊所馳秋毫也。仰願地藏菩薩伏乞三宝諸天照見此功、哀愍其志、一期終焉之暮、必遂兜率内院、三会下生之曉、速授唯心法門而已。

右筆華嚴宗末葉法印宗性

年齢五十二

夏臘満四十⁽²⁷⁾

右の奥書によれば、(1)宗性五十二歳の時の建長五年（一二五三）三月二日に本書が書かれたこと、(2)本書の元本として覚遍の自筆本があったこと、(3)宗性は重病を患って身心が微劣になり、亡くなった後には地藏の哀愍（功德）によって兜率内院への往生を遂げようとしていたこと等が分かる。光明院権僧正覚遍（？―一九九―一二五八）は藤原宗輔の孫であり、興福寺の権少僧都宗信の弟子にあたる。正治元年（一一九九）、二十五歳の時に維摩会堅義、承元二年（一二〇八）に同講師、寛喜三年（一二三二）に同探題、法隆寺別当となっている。その後、宝治元年（一二四七）に興福寺別当となり、正嘉二年（一二五八）に八十四歳で没した。⁽²⁸⁾この覚遍によって『地藏菩薩感応抄』の元本（自筆本）が著され、病に苦しむ宗性が入手して書写し、兜率往生を願った。『地藏菩薩感応抄』の奥書の内容を見る限り、宗性は自分の重病に際して死後の加被救済を深く信じていたと考えてよいであろう。

この『地藏菩薩感応抄』について野村卓美氏は、地藏信仰は「貞慶↓覚遍↓宗性」、および「貞慶↓良遍↓忍性」という弟子筋によって継承されていき、その過程で宗性は『地藏菩薩感応記』（以下『感応記』）の「抄本」として『地藏菩薩感応抄』を記したと論じた。さらに、宗性を法相宗の人と見立て、宗性の地藏信仰は法相宗の僧侶としての弥勒信仰の一部として展開したものに過ぎなかったと論じているが、⁽²⁹⁾はたしていかがであろうか。この点を検証するにあたり、まずは『地藏菩薩感応抄』の構成を見ておきたい。図示すると、およそ次のようになる。

	章	引用元
一	地藏名号理観事	『大乘大集地藏十輪經卷第一』『成唯識論卷第十』『金光明最勝王經疏』『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讀』
二	調伏衆惡善勝法門	『大般若波羅蜜多經卷第五百七十八 第十般若理趣分』『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讀 卷第三』『佛說千佛因緣經』『成唯識論述記』『成唯識論 卷第十』『仏垂般涅槃略説教誡經（遺教經）』
三	唯識真如二門滅罪生善要問也	『真言秘密胎藏釈』『金剛釈』
四	大集經文 地藏菩薩	『大乘大集地藏十輪經序品第一』
五	迦旦遮羅女因縁事	『冥報記』『感応記』
六	満中家勇士事	『今昔物語集』卷十七「地藏の助けに依りて活へる人六地藏を造る語」及び「宇治拾遺物語」卷三「多田新発意郎等の事」
七	以慈母志量千鉢尊像事	なし

八	洞院殿地藏供養	なし
九	帝王任御意知食世事	なし
十	山法師猶地藏事	なし
十一	堀川殿地藏千日供養結願（奉爲女院）	なし
奥書		

一―三は経典の引用であり、四―十二は天竺・中国・日本の地藏に関する故事・説話から構成されている。宗性の著作の『華嚴経観世音菩薩感応要文抄』・『華嚴経文殊師利菩薩感応要文抄』『華嚴経普賢菩薩感応要文抄』『弥勒如来感応抄』『地藏菩薩感応抄』の『華嚴経感応要文抄』のうち、故事・説話が引用されているのは『弥勒如来感応抄』『地藏菩薩感応抄』のみである。³⁰⁾ 弥勒に関する事々や兜率往生の事例としては、『弥勒如来感応抄』第三ではインド・中国の例を『華嚴経伝記』に、第四では『名僧伝』等に求めている。また、日本に関する兜率往生等の事例は、第四では『拾遺往生伝』に、第五では『日本高僧伝要文抄』（『国史大系三十三』）等に求めている。

『弥勒如来感応抄』と『地藏菩薩感応抄』の共通点としては、「劉伯父家小女」の話があげられる。これは、『応驗記』第二十（『正統蔵』、第一輯第二編乙第二十二套第二冊）に引用されている説話である。『応驗記』は宋の僧、常謹（?―九八九―?）が『地藏本願経』の思想を受けて編集した全三十二話からなる仏教説話集である（成立九八九年）。現存本には『正統蔵経本』と梅津次郎所蔵本とがある。³¹⁾

『弥勒如来感応抄』では第五巻で「劉伯父家小女」の同内容が二回、『地藏菩薩感応抄』では「迦旦遮羅女因縁事」の中で一回書かれる。『弥勒如来感応抄』第五には、『応驗記』からの重複も含めて地藏関連の記事が全十五話書かれている。『弥勒如来感応抄』第五のみが兜率往生以外の地藏による救済の説話を引用しているが、その特徴の分析は後日に譲るとしても、『弥勒如来感応抄』第五が『地藏菩薩感応抄』の七年後の、宗性五十九歳の文応元年（一二六〇）に書かれていることから、『地藏菩薩感応抄』が宗性の兜率往生への信仰（弥勒浄土信仰）に大きな影響を及ぼしていることが窺われる。

また、貞慶の『観世音菩薩感応抄』、弁暁の『八幡大菩薩并心経感応抄』、宗性の「感応要文抄」題の著作においては、説話から引用がなされていない点より、この「経典＋説話」の構成は宗性の「感応抄」題の書物にのみ共通する構成であったといつてよいであろう。

では、『地蔵菩薩感應抄』は、野村氏の主張するように、はたして『応驗記』の「抄本」だったのであろうか。これについて野村氏は、梅津本末に「地蔵菩薩感應記」とあることから、宗性の『地蔵菩薩感應抄』を抄本であると見た。なるほど「迦旦遮羅女因縁事」の「劉伯父家小女」などは、「地蔵驗記云」とあるから、確かに『応驗記』にも書かれていることがわかる。しかし、六「満中家勇士」は日本を舞台とした説話である。この話は、多田満仲の家臣で多くの殺害を犯してきた者が、地獄において閻魔王の裁判を受ける際に、地蔵菩薩が生前に地蔵堂において帰依したことを証明し、難を逃れたという内容になっている。類似した話が『今昔物語集』巻十七「地蔵の助けに依りて活へる人六地蔵を造る語」及び『宇治拾遺物語』巻三「多田新発意郎等の事」にも掲載されている。

一方、『応驗記』はすでに指摘したように中国での故事を集めたものであり、当然、日本の説話である「満中家勇士」「帝王任御意知食世事」「堀川殿地蔵千日供養結願（奉爲女院）」「洞院殿地蔵供養」は引用されていない。抄本とは辞書によれば、「（一）一部を抜き書きした本。（二）歌集、漢籍などの注釈書。（三）原本の一部分だけを写し取った書面」とある。この点では、『地蔵菩薩感應抄』は『応驗記』の抜き書きでもなければ注釈書でもないので、『地蔵菩薩感應抄』は『応驗記』の「抄本」であるとはいえないのである。

四、『地蔵菩薩感應抄』における地蔵信仰の論理

前節で『地蔵菩薩感應抄』における性質を見たが、本節では具体的にその内容を見ていくことにしたい。まず、『地蔵菩薩感應抄』は一―三において、地蔵に関する經典が引用されているが、いかにして地蔵によって救われるのかについて、その仏教的論理を確認したい。これについて、まず第一の「地蔵名号理観事」では、以下のように記されている。

一日称地藏

十輪第一云、假使於「弥勒・妙吉祥・観音・普賢類、而爲」上「首恒河沙等」、諸大菩薩於「百劫中」、至心・帰依・称名・念誦・礼拝・供養求「諸所求」、不_レ如_下有人於「一念頃」至心・帰依・称名・念誦・礼拝・供養地蔵菩薩_上。求「諸所願」速得「満足」。又復如_レ是末代衆生諸有縁所_レ宜_レ聞故。所以偏讚、不_レ爾菩薩亦応「勝仏」、等位菩薩心_レ有「勝劣」⁽³²⁾文

名号何故有^二此勝德^一哉。

地者真如藏者、唯識理觀与唯識觀顯主。此名号中真如大地上生^三福智之才^一、至^三賴耶識藏^一、応^下収^二万德之聖財^一意也。唯識論中名^三持種依・迷悟依^一。一持種依。謂本識由^三此能持^二染淨法種^一与^二染淨法^一俱爲^三所依^一。二迷悟依、謂真如由^三此能作^二迷悟根本^一、諸染淨法依^レ之得^レ生^三生^一。地者、生成住得義、万法生長、住持所依、名^レ之爲^レ地。

如是之十地既攝^二有爲無爲功德^一、以爲^二相性^一云々。

瓔珞經云、持^二一切功德^一名^レ地。生^三成一切因果^一名^レ地云々。尋^二地体^一者、即無爲功德常住真理也。真理諸法実壯事 水波爾事

最勝疏中引^三普賢注經^一云、以^三此身心^一如^二空中風^一、住^二無相^一、歸^二命如如一切三宝^一。行^二此懺悔^一者、身心清淨不^レ住^二法中^一。猶如^二流水^一。念念之中見^二十方仏^一文⁽³⁴⁾

理趣分疏云、以^二經威力^一能調^二衆惡^一故、是殺罪並得^二消除^一。由^レ悟^二法性^一、起^二斯勝行^一、故此大罪不^レ招^二惡果^一云々。⁽³⁵⁾

法身本性能破^二生死^一、堅実難^レ懷如^二金剛^一故。菩薩之法、依^レ教所詮以行^二修証^一故。義平等云々。⁽³⁶⁾

此說性平等性金剛法門也。⁽³⁷⁾

と。ここではまず『大乘大集地藏十輪經』を引用し、地藏に至心・帰依・称名・念誦・礼拝・供養することは他の菩薩にまさり、所願が速やかに満足することを示す。次いで、名号がなぜこの勝徳に勝るのかという問いに対して、「地」は真如藏であり、それは唯識理觀にほかならず、主を顯すという。そして、地藏の名号は真如の大地に福智の才を生じ、阿頼耶識に至るので、地藏の名号には万徳の聖財を収める意がある、とする。このような阿頼耶識について宗性は『成唯識論』を引用し、阿頼耶識は持種依と迷悟依であると説く。阿頼耶識（本識）は無記性なので、染の種子も淨の種子も持っているので持種依なのであり、染淨の諸法の所依となる。真如によって迷悟が生じ、真如によって染淨が生じるので迷悟依にもなると述べている。これによって宗性は、真如の大地に福智の才を生じて円満なる阿頼耶識を成じる地藏の名号の勝徳を示しているのである。さらに宗性は、地は万法を生長し、所依である阿頼耶識を住持するといひ、地藏は十地の位にあつて有爲・無爲の功徳を摂めていると述べている。要するに、この功徳によって、罪を消し、勝行をおこし、大罪を犯しても惡果を招くことはないという論理を構築していたこと

になる。宗性は『成唯識論』を引用しながらも、「真如」について語っている。この点を考慮にいと宗性のスタンスは唯識教理を取り入れた華嚴に立脚していたと考えられる。先述した野村氏は「宗性を法相宗の人と見立て、宗性の地藏信仰は法相宗の僧侶としての弥勒信仰の一部として展開した」と述べていたが、『地藏菩薩感応抄』に見られる右の論理には真如（法界）への言及があるので、あくまでも宗性は法界縁起を説く華嚴学に立脚した思想展開を示していたと見るべきである。その証左に、奥書にも「右筆華嚴宗末葉法印宗性」と書いている。したがって、宗性を安易に法相宗の僧侶であったと解釈すべきではなく、広く華嚴学の立場より唯識の教義を用いていたと見るべきである。宗性の思想・信仰を研究するにあたっては、この点にも留意する必要があると考えられる。

次に、「衆惡の調伏」について宗性は、第二の「調伏衆惡普勝法門」において次のように述べている。

復依^レ調伏一切惡法、釈迦牟尼如來之相、爲^二諸菩薩、宣^レ說般若波羅蜜多。撰^二受一切法、平等性甚深理趣普勝法門。⁽³⁸⁾

疏云、一切惡法者二障分別。因果分別・染淨分別。悉能除^レ之。⁽³⁹⁾ 釈迦者能義。牟尼者寂默義。能調^二衆惡、離^二諸誼動。誼動之法、謂^二生死法。故名^二能寂默如來之相^一文。

謂^二貪欲性、無^二戲論^一故等下、三毒十障、本惑隨惑煩惱業果、有漏雜染、明離^二一切戲論障垢^一普勝法門相也。⁽⁴⁰⁾

假使殺^二害三界所撰一切有情、而不^三由此墮^二於地獄^一云々。⁽⁴¹⁾

疏云、以^二經威力^一、善能調^二伏一切煩惱及隨煩惱惡業等^一故。設有^二是罪、不^レ招^二惡果^一。○一切惡業從^二煩惱^一生、一切煩惱從^二分別^一起。今

離^二戲論、斷^二諸分別。分別既盡、惑業亦亡。故此大罪聞^レ經、懺悔定得^二消滅^一文。⁽⁴²⁾

釈尊名号若聞^二名號^一、礼者、除^二七百万億阿僧祇劫生死之罪^一。⁽⁴³⁾

地藏菩薩名号功德發^二釈尊本願^一、以^二理觀^一爲^レ本。可^二滅罪^一樣案立也。

我今拳^二世尊^一發^二如是誓願^一等也。

唯識門滅罪生善

又心外法輪迴生死⁽⁴⁶⁾

或諸愚夫迷⁽⁴⁷⁾「執於境」

一切有情不^レ觀^二自心^一文

是故汝等當^レ好^レ制^レ心⁽⁴⁸⁾

と。そもそも悪を生じるのは、分別によるものである。そのため、衆悪を調伏するためには誼動の法（生死の法）を離れ、釈尊のように寂黙するのがよく、一切の戲論を離れ、釈尊が菩薩たちのために説いた般若波羅蜜多の普勝法門に入るべきである。これによって、一切有情を殺害しても、地獄に堕ちることはない。般若波羅蜜多の威力によって煩惱と随煩惱を調伏すれば、罪はあっても悪果は招くことはない。すべての悪業は煩惱より生じ、すべての煩惱は分別より生じる。戲論を離れて分別を断ずれば、惑業も消える。ゆえに殺害という大罪でも経を聞き、懺悔すれば消える。釈迦の名号を聞けば遙か昔からの罪が消えるように、地蔵においても同様であると述べる。そして、釈尊の名号の功德を例に挙げ、地蔵菩薩もまた釈尊と同様の願いを建て、唯識理觀をもつて滅罪の道を示したのである、と述べたのである。

では、唯識門の滅罪生善とは何であるのか。先にあげた引用文では「自心を觀ぜずして心を制すること」でなされることが逆説的に示されているが、これについては更に第三の「唯識真如二門滅罪生善要問也」では、次のように詳細に述べられている。すなわち、

真言秘密胎藏釈云、八葉諸尊部即識実性唯識、サレハ一切衆心性真如中納過^二恒沙諸仏万徳^一釈、

金剛釈云、三十七尊中以^二鏡智等理真実功德^一、爲^二其本^一。是文唯識唯心妙理也。

私蜜上乘^二定旨^一、頓熟頓証法門ト中モ証ハ地蔵菩薩ニテ御 聖靈種智依^二此善^一開發シ聖靈内証依^二此像力^一成熟見也。

大集經文 地蔵菩薩

仏説大集經月藏分時地蔵菩薩作^二苾芻形^一。与^二八十百千那由多菩薩^一俱自^二南方^一來至爾時衆中有^レ好^レ疑問^二菩薩^一云、此菩薩成就何等功德善根。仏答云、如^レ是大士功德善根。一切世間天人大衆皆不^レ能^レ測^二其量淺深^一、若聞^三如來爲^レ汝広^二説如^レ是大士功德善根^一。一切世間天人大衆、皆生^二迷悶^一或不^二信受^一。以^二偈讚^一曰假使百劫中、讚^二説其功德^一、猶尚不^レ能^レ尽、故皆當^二供養^一。

貞慶と宗性の地蔵菩薩信仰

以「要言」之於「一一日每晨朝時、爲欲成⁵³就諸有情⁵⁴故。入⁵⁵兢伽河沙等諸定。從⁵⁶定起⁵⁷已遍於十方諸仏国土、成⁵⁸熟一切所化有情⁵⁹。隨⁶⁰其所応、利益安樂。此善男子、已於⁶¹無量無數大劫五濁惡時無仏世界⁶²、成⁶³熟有情⁶⁴。」

とあるように、「胎藏界曼荼羅の八葉諸尊が唯識の実性であるから一切衆生の心性は真如であり、したがって恒沙諸仏の万徳がおさめられている」という『真言秘密胎藏釈』の記述、および「三十七尊が大円鏡智等の真実の功徳を根本としている」という『金剛釈』の文をもとに、宗性は地藏菩薩の救済を「頓熟頓証法門」「唯識唯心の妙理」であり、「この善によつて聖霊の種智を開発することができる」としている。また、『大乘大集地藏十輪經』の文（大正一三・七二二中・七二三中の略文）を引いて「地藏の功徳が測り知れない」ことを述べ、十方の仏国と無仏世界において衆生を成熟させたことを縷々述べている。

以上の宗性の地藏に関する論理をまとめると、その根本には釈尊が説いた般若波羅蜜が前提とされていることが知られる。殺人などの大罪はその罪によつてではなく、その罪を生み出す煩惱によつて地獄などの悪果が引き起こされるのであつて、その煩惱自体を般若波羅蜜によつて調伏することで地獄などには堕ちないという論理となつてゐる。この滅罪を宗性は唯識門に求める。そして、唯識門の根本である功徳を地藏菩薩は成就しており、有情を成熟させると説く。したがつて、地藏菩薩の名号は唯識の根本である阿頼耶識にまで及び、我々の煩惱を調伏し、懺悔すれば地獄に堕ちることはないという論理が構築されていることが知られるのである。

以上のように、『地藏菩薩感應抄』の前半の一〇四においては主に地藏菩薩の名号の功徳による滅罪が主眼であつたが、五以降の説話ではその他の地藏菩薩の功徳が挙げられる。八の「洞院殿地藏供養」では以下のように述べられている。⁽⁵⁵⁾

夫、地藏菩薩者釈迦如来付属大士、無仏世界能化導師也。利益超⁵⁶他故、本師寄⁵⁷其付嘱、本願殊余⁵⁸故、群生專致⁵⁹帰依、他方浄土難⁶⁰生、無⁶¹導而不⁶²送、極重惡人難⁶³救、無⁶⁴往而不⁶⁵代、況於⁶⁶人天之果報⁶⁷哉。況於⁶⁸信心之引接⁶⁹哉。方今禪尼殿下、眼前御⁷⁰覽世上転反⁷¹身上思⁷²召余算少残⁷³、六根所化今生罪多積、三途苦報⁷⁴来世界。（中略）而問不⁷⁵図御⁷⁶参詣太子御廟⁷⁷之時、不⁷⁸期聽⁷⁹聞地藏薩埵⁸⁰之功徳。忽然催殷重之信心、不日造⁸¹顯慈悲之尊像、（中略）願今生值遇為⁸²始生々⁸³作⁸⁴本尊願、当時結縁爲⁸⁵基。世々必施⁸⁶濟度。若速流⁸⁷惡趣苦器⁸⁸者、願焦⁸⁹

忍辱之肩^一代^二猛利之重苦。若久廻^三三途故郷^一者、願以^三神通之力^一教^二出離之方便^一」⁽⁵⁷⁾

と。ここでは、地藏菩薩が釈尊から付属された無仏世界の能化の導師であり、世々に済度を施す存在であることが示される。その上で、惡趣に落ちた時の重苦の肩代わりや、地獄・餓鬼・畜生の三惡道（三途）を輪廻した際の出離の教示を願っている。したがって、地藏菩薩を地獄等の惡趣の救済者と見ていたことは明らかである。また、前にも指摘した地藏菩薩が罪人の弁護者であつた点については、源満仲の家臣で殺生を繰り返していた者が死んで地獄に墮ちたことを述べる「満中家勇士事」⁽⁵⁸⁾に、次のように記されている。

到^二問魔庁^一、見^二廻魔庭^一、無^二教罪人^一。随^二罪輕重^一、呵^二責刑罰^一。見^レ此^レ聞^レ之。惣^レ不^レ知^二爲方^一。思^二連一生所犯^一。一^レ善^ト無^下可^二申出^上事^一。悔^レ非^レ流^レ淚。躡^二真官獄吏ノ前^一時、一^レ僧出來。我^レ檀越者云種々乞請畢。問^二誰人助^一。我^レ彼寺地藏菩薩也。聊依^二歸依功^一來濟云々⁽⁶⁰⁾。

と。これを見ると、地藏菩薩が閻魔王の前で弁護するあり方は地藏の功德として広く受け止められていたことが知られる。

このような輪廻の苦惱から衆生を救済する地藏菩薩のはたらきは、次には「淨土への往生」という形でも示されていくことになる。これについて「山法師猶地藏事」には、次のように記されている。

依^二薩埵之引接^一出^二三途八難苦域^一、引^二薩埵化導^一遂^二九品蓮台之往生^一」⁽⁶²⁾

と。すなわち、地藏菩薩の引接によって三途八難の苦域を出で、九品にしたがって阿弥陀仏の淨土に往生することが示されているのである。しかし、三途を脱却したからといって、すぐに九品往生が行われるわけでない。なぜならば、奥書には次のように記されているからである。

仰願地藏菩薩、伏乞三宝諸天照^二見此功^一、哀^二愍其志^一、一期終焉之暮、必遂^二兜率内院^一、三会下生之曉速授^二唯心法門^一而已

この奥書と前の文を合わせて考えるならば、地藏の引接によって輪廻の世界を離れて兜率内院へ往生を遂げ、弥勒の下生と共に娑婆世界に生まれて龍華三会の会座で唯心法門を受け、その後に地藏の化導によって阿弥陀仏の浄土に往生するという流れが確認できる。これは、貞慶が『発心講式』『安養報化』『心要鈔』等で示した極速三生論そのものといつてよい。⁽⁶³⁾したがって、宗性の往生論には、貞慶の強い影響があったと考えられるのである。また、春日大明神と地藏を一体化する点にも、貞慶からの影響が考えられる。この点について「堀川殿地藏千日供養結願〈奉_レ爲_二女院_一〉」には、次のように記されている。

其中禪定比丘殿下万姓多世受_二藤門美華之遺流百神満朝_一忝爲_二当社権現之末苗_一、^{苗本カ}藤門多人増我_二大明神_一、(中略)以_二今生_一御加被_一、又可_レ量_二当来_一御引接_一事候。⁽⁶⁴⁾

と。春日大社の本地仏について貞慶は、『春日権現講式』においては、一宮の本地を釈迦如来、二宮の本地を葉師如来、三宮の本地を地藏菩薩、四宮の本地を十一面観音、若宮の本地を文殊菩薩としていたが、右の文からすると宗性もまた地藏菩薩と春日権現を同一視し、地藏菩薩に対して現世での加被と来世での引接を願っていたことが知られるのである。

以上、『地藏菩薩感応抄』の後半にあたる幾つかの説話を見てきたが、宗性は単に地藏菩薩の持つ地獄等の輪廻の苦報を抜済する功德について論ずるだけでなく、地藏菩薩の「加被」によって兜率上生から極楽往生に至るまでの壮大な仏道論を有していたことが明らかになったといつてよいであろう。その論理は貞慶の極速三生の理論を受け継いでいるが、宗性が地藏に求めたのは単に地獄からの救済ではなく、実に三途からの脱却と兜率内院への上生および三会下生から極楽往生に至るまでの仏道への加被であったことが知られるのである。

五、むすび

『地藏菩薩感応抄』は『応驗記』の抄本ではない。宗性自身が重病に苦しむ我が命のあり方を見つめながら、『応驗記』や『今昔物語』をも引用しながら書いたものである。したがって、「感応」とあるがこれは、『応驗記』の「地藏菩薩感応記」から来ているのではない。また、現存す

る『地藏菩薩感應抄』が覚遍の書いたものなのか否か、あるいは宗性が加筆などを行っているのか否か等は定かではないが、少なくとも宗性が自分の重病による死に際して地藏を信仰し、『地藏菩薩感應抄』を書いたことは確かである。

『地藏菩薩感應抄』では、地藏菩薩によつて救済される論理として、地藏の理観による名号と懺悔による救済が説かれている。名号が所依である阿頼耶識に働きかける様子を描き、衆生の殺害などの表に現れた罪ではなく、その根本として内在する煩惱を調伏することに主眼が置かれていることが知られる。

従来、宗性の地藏信仰は貞慶のものを受け継いだとされてきた。地藏菩薩の加被による閻魔庁での弁護や地獄から救済という点では共通しているが、貞慶は地藏菩薩の悲願に着目し、地獄など悪趣に堕ちた者への救済を主としたのに対して、宗性は説話だけでなく、經典類を用いて地藏菩薩の名号による滅罪の論理を構築した。宗性にとっては弥勒菩薩のまします兜率への往生が主眼であり、その前提として六道輪廻を抜け出す際に頼りにしたのが地藏菩薩であったということが出来る。

註

- (1) 蓑輪顯量『中世初期南都戒律復興の研究』京都…法藏館、一九九九年、八七—九二頁、一七七—一八三頁。
- (2) 北畠典生『『観念発心肝要集』の研究』京都…永田文昌堂、一九九四年、三五—三六頁。
- (3) 佐脇貞明『貞慶の観音信仰と覚信』『龍谷史壇』四二、一九五七年。
- (4) 平岡定海『日本彌勒淨土思想展開史の研究』東京…大蔵出版、一九七七年、二九四・二九五頁。
- (5) 阿部泰郎『東大寺図書館蔵「八幡大菩薩并心経感應抄」(解題・翻刻・釈文)』福田晃・廣田哲通編『唱導文学研究』第四集、東京…三弥井書店、二〇〇四年。
- (6) 新倉和文『東大寺所蔵 貞慶撰「観世音菩薩感應抄」』『南都仏教』八九、二〇〇七年。
- (7) 宗性の文書の中には感應抄と関係があると思われる感應要文抄題の文書がある。具体的には東大寺図書館所蔵の『華嚴経観世音菩薩感應要文抄』(113-14-1)『華嚴経文殊師利菩薩感應要文抄』(113-15-1)『華嚴経普賢菩薩感應要文抄』(113-120-1)『地藏菩薩感應抄』(113-92-1)『華嚴経感應要文抄』(113-94-1)があげられる。また、
- (8) 前掲、平岡、一九七七年。
- (9) 平雅行『解脱房貞慶と悪人正機説』東京…塙書房『日本中世の社会と仏教』、一九九二年。平氏は『地藏講式』中の「利益之新世也、末代殆過三上代、感應之満眼也、悪人巡超三善人」という文言から、南都仏教にも悪人正機説が存在していたことを指摘した。これに対して清水邦彦氏は、『地藏講式』の悪人は地獄必定の極悪人であり、

この極悪人こそが地藏の救済対象であり、その極悪人に貞慶自身は含まれず、貞慶は自己が発心すれば（無姓闡提ではない）仏になりうる存在であるとした。その結果、法然・親鸞の悪人正機説とは異なると結論づけた（清水邦彦「貞慶の地藏信仰」『倫理学』（十二、一九九五年）。一方、野村卓美氏は貞慶の「悪人」は非日常的な危機的状況下にいるもので、その人々を貞慶は救うために著したとし、悪人の具体例は『地藏講式』の依頼者の小田原上人（瞻空）であると論じた（野村卓美「解脱房貞慶と地藏信仰」貞慶と地藏説話・貞慶著『地藏講式』を中心に」大谷大学文芸学会『文芸論叢』（七十二、二〇〇九年）。

- (10) 貞慶にとつての講式について、西山厚氏は聴衆の心を揺さぶり、同行との一体感の中で、信仰を更に高めていくと同時に作者の信仰内容がまとまった形で示されるものとする（西山厚「講式から見た貞慶の信仰——『観音講式』を中心に——」中世寺院史研究会編『中世寺院史の研究 下』京都・法蔵館、一九八八年）。野村卓美氏は講式とは自分の宗教的理念・信仰心を吐露するよりも外的要因（聴衆や法会の依頼者）を配慮して著述される（野村卓美「『法華講式』解説」大正大学総合佛教研究所講式研究会編『貞慶講式集』（大正大学総合佛教研究所研究叢書：第二巻）東京・山喜房佛書林、二〇〇〇年。）とする一方、山田氏は、貞慶は全く新しいタイプの講式を創作したとした。例えば、「発心講式」でおのれの発心を仏前に披瀝誓約するもので、大衆とともに演ずる講式とは正反対の、たった一人で独演する講式であったとしている（山田昭全「序にかえて」前掲『貞慶講式集』、二〇〇〇年）。以上のように、先行研究では講式に貞慶の信仰（内的要因）と外部からの要請（外的要因）の両方の要素が反映していることが指摘されている。

- (11) 『地藏講式』、前掲『貞慶講式集』、二〇〇〇年、一〇六—一〇七頁（ただし、句読点・返り点は論者によって一部変更している。また、引用・翻刻時に旧字体は今の字体に直した。以下同様。）

- (12) 『地藏講式』、前掲『貞慶講式集』、二〇〇〇年、一〇八—一〇九頁。

- (13) 『地藏講式』、前掲『貞慶講式集』、二〇〇〇年、一一〇—一一一頁。

- (14) この『地藏講式』の箇所「浄国」だけでは阿弥陀仏の極楽浄土とは特定できない。しかし、貞慶撰『地藏講式』一段式（講式データベースNiels Guelberg）には

「弥陀来迎ノ時、地藏菩薩随ツテ来リ給フ」ト。然レバ、弟子ヨノツネニハ道心堅固ニシテ、念仏諸行ノ勤メヲ怠ラズ。命終ニハ来迎引接シテ、往生極楽ノ望ミ違フコト無カラン。

とあり、阿弥陀仏の極楽浄土と特定できる。

- (15) 身延山大学図書館所蔵『論第八卷尋思鈔別要』三四丁表—三八丁裏・未翻刻（西山良慶「法相論義抄・良算撰『愚草』についての一考察——良算の述作と貞慶との関係を中心に——」『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』二十、二〇二〇年、六六頁に一部翻刻有り）。

- (16) 楠淳證・新倉和文「貞慶撰『観世音菩薩感應抄』の研究」京都・法蔵館、二〇二一年、二〇六頁。

- (17) 楠・新倉、前掲、二八一頁。

- (18) 平氏は『地藏講式』の「悪人還超『善人』」の箇所を以て貞慶には悪人正機の考えがあったとするが（注9参照）、貞慶は地藏はあくまで加被を与える存在であって、親鸞の考える阿弥陀仏のように絶対他力による救済を行っていたとは考えにくい。『地藏講式』の「悪人還超『善人』」は善人よりも悪人を優先するとは言えるものの、

親鸞の悪人正機は阿弥陀の絶対他力を前提としており、貞慶の地藏による救済においては絶対他力を前提としていない。あくまで悪人の自力あつての救済であるといつてよいであろう。

- (19) 『地藏講式』、前掲『貞慶講式集』、二〇〇〇年、一〇一—一〇二頁。

- (20) 『地藏講式』、前掲『貞慶講式集』、二〇〇〇年、一〇七頁。

- (21) 『地藏講式』、前掲『貞慶講式集』、二〇〇〇年、一〇四—一〇六頁。

- (22) 『大乘大集地藏十輪經』(大正一三・七二・下)「爾時世尊。告無垢生天帝釋曰。汝等當知。有菩薩摩訶薩名曰地藏。已於無量無數大劫。五濁惡時無佛世界成熟有情。」

- (23) 後藤昭雄「金剛寺藏 佚名諸菩薩感應抄 所引『觀世音心驗記』佚文」『大阪大学文学部紀要』三九、一九九九年・箕浦尚美編『天野山金剛寺善本叢刊』(第二期第四卷)、東京・勉誠出版、二〇一八年。

- (24) 平岡、前掲、一九七七年。

- (25) 阿部泰郎「東大寺図書館蔵『八幡大菩薩并心経感應抄』(解題・翻刻・釈文)」福田晃・廣田哲通編『唱導文学研究』第四集、東京・三弥井書店、二〇〇四年。

- (26) 新倉和文「貞慶著『觀世音菩薩感應抄』の翻刻並びに作品の意義について—阿弥陀信仰から観音信仰へ—」南都仏教研究会『南都仏教』九二、二〇〇八年。この新倉氏の翻刻を改正したものが及び楠・新倉、前掲、二〇二一年。以下、『觀世音菩薩感應抄』を引用する際には楠修正版を用いる。

- (27) 平岡定海『東大寺宗性上人の研究並史料(中)』東京・日本學術振興会、一九九五年、四一六—四一七頁。

貞慶と宗性の地藏菩薩信仰

- (28) 『尊卑分脈』・『法隆寺別当次第』『興福寺別当次第』『三會定一記』『大日本史料 第五編二十二』など参照。

- (29) 野村卓美「解脫房貞慶と地藏信仰—貞慶と地藏説話・貞慶著『地藏講式』を中心に」大谷大学文芸学会『文芸論叢』(七二)、二〇〇九年。ただ、当時の兼学の在り方から考えると宗性は「法相宗の僧侶として」ではなく、「華嚴を宗として兼ねて法相を学んだ」という実態であつたと思われる。

- (30) 『地藏菩薩感應抄』と各「感應要文抄」との違いは各「感應要文抄」がいずれも華嚴經と題の中にあるように、『華嚴經』及び『華嚴經』の各諸論からの引用で構成されている。一方、『地藏菩薩感應抄』は特定の經典に限らず、広く出典を求め、宗性自身の言葉で書かれている点である。

また、宗性撰の『華嚴經觀世音菩薩感應要文抄』の奥書に

(前略) 願与^二上人^一同生^三觀音補陀落^一之堺、願与^二上人^一俱詣^三彌勒都率天^一之砌、世々習^三学大慈大悲之法門^一、生々經^三歴地前地上之修行^一、遂成^三無上之仏果^一、還度^三有縁之衆生^一、廻向無^二願望^一有^レ之、觀音大士哀愍知見矣。

とあり、宗性は貞慶が深く觀音菩薩に帰依していたことを知り、『華嚴經觀世音菩薩感應抄』を書いたことがわかる。この貞慶の觀音信仰を告白した文書が貞慶撰『觀世音菩薩感應抄』である。この文書に関し、楠氏は『觀世音菩薩感應抄』の命名は宗性の可能性が高いと『觀世音菩薩感應抄』の研究(二〇二一年観/法蔵館)の中ですでに指摘しているが、さらに再度の論証を『解脫房貞慶の世界—『觀世音菩薩感應抄』を読み解く—』(二〇二四年刊/法蔵館)の中で示している。

- (31) 収集された説話のうち年代の明確なものを見ると、六五〇年から

九八〇年に分散しており、唐代の信仰が採録されている。例えば第一話・第二話の「放光菩薩像」が中国では幅広く信仰されていたことを考えると、応驗記の説話は単に文献上の話ではなく、当時の信仰を記したものである。日本の地藏信仰の初期説話集、『地藏菩薩靈驗記』『今昔物語集』卷十七の成立には、『地藏菩薩応驗記』の影響が大である。

- (32) 十輪經の箇所は『大乘大集地藏十輪經』（大正一三・七二六・上）「弥勒・文殊・觀世音・普賢等而為上首如是等恒河沙諸大菩薩。若人於百劫中。礼敬供養欲求所願。不如於一食頃礼拜供養地藏菩薩。功德甚多所願速得皆悉滿足。何以故此地藏菩薩。於一切衆生能大饒益為如意宝故。此族姓子。若欲成熟衆生故。能發堅固大悲伏藏。令滿一切衆生心願。是故善男子善女人。应当供養地藏菩薩」であるが、『法華玄贊』にはそのまゝの引用箇所がある。『妙法蓮華經玄贊』（大正三四・八四八・下―四八九・上）「且將爾許讚觀發心十輪經第一卷說、假使於弥勒・妙吉祥・觀自在・普賢之類而為上首。（苑伽沙等諸大菩薩。）於百劫中至心歸依称名、念誦禮拜供養求諸所願。不如有人於一念頃至心歸依。称名念誦、禮拜供養地藏菩薩、求諸所願速得滿足。又復如是末代衆生於諸有緣所宜聞故。所以偏讚。不爾菩薩亦應勝。等位菩薩應有勝劣」。

- (33) 『成唯識論』卷第十（大正三一・五五・上）「余修所斷迷事隨眠根本後得俱能正斷。二所転依。此復有二。一持種依。謂本識。由此能持染淨法種與染淨法俱為所依。（聖道転令捨染得淨。余依他起性雖亦是依而不能持種故此不説。）二迷悟依。謂真如。由此能作迷悟根本諸染淨法依之得生」。

- (34) 『金光明最勝王經疏』（大正三九・二四六・上）「普賢觀經云。以此身心如空中風住無相理帰命如一切三宝。行此懺悔者身心清淨不

住法中。猶如流水。念念之中見十方仏等」。

- (35) 『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讀』卷第三（大正三三・五一・中）。

- (36) 『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讀』卷第三（大正三三・五四・上）「云々」の箇所は「名菩薩性。仏亦亦是義平等性」と続く。

- (37) 『地藏菩薩感應抄』一丁。

- (38) 『大般若波羅蜜多經第五百七十八 第十般若理趣分』（大正七・九八七・下）「仏説如是寂靜法性般若理趣現等覺已。告金剛手菩薩等言、若有得聞如是四種般若理趣現等覺門、信解受持誦修習。乃至當坐妙菩提座。雖造一切極重惡業、而能超越一切惡趣、疾証無上正等菩提。爾時世尊復依調伏一切惡法釈迦牟尼如來之相。為諸菩薩宣説般若波羅蜜多損受一切法平等性甚深理趣普勝法門」。ここでは、前半部が省略されているが、罪業を造つても四種般若理趣によつて惡趣を超えることが書かれている。その内容はこの引用の後で書かれているので、省略されたものと思われる。

- (39) 『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讀』卷第三（大正三三・五十・下）後には「依此調伏一切惡法能寂如來之相説此法門也」と続く。

- (40) 『大般若波羅蜜多經第五百七十八 第十般若理趣分』（大正七・九八七・下）「謂貪欲性無戲論故瞋恚性亦無戲論。瞋恚性無戲論故愚癡性亦無戲論。愚癡性無戲論故猶預性亦無戲論。猶預性無戲論故諸見性亦無戲論。諸見性無戲論故憍慢性亦無戲論。憍慢性無戲論故諸纏性亦無戲論。諸纏性無戲論故煩惱性亦無戲論。煩惱性無戲論故諸惡業性亦無戲論。諸惡業性無戲論故諸果報性亦無戲論。諸果報性無戲論故雜染法性亦無戲論。雜染法性無戲論故清淨法性亦無戲論。清淨法性無戲論故一切法性亦無戲論。一切法性無戲論故當知般若波羅蜜多亦無戲論」。この箇所を『地藏菩薩感應抄』では要約し

ている。

- (41) 『大般若波羅蜜多經卷第五百七十八 第十般若理趣分』(大正七・九八七・下)
- (42) 中略部は「相縛縛衆生亦由龜重縛善。後又修止觀方乃俱解脫。」
- (43) 大正藏は「懺悔」ではなく「信解」
- (44) 『大般若波羅蜜多經般若理趣分述讀 卷第三』(大正三三・五一・中)
- (45) 『仏説千仏因縁經』(大正一四・七十・下)「若有四衆聞彼仏名。五體投地歸依頂礼。即得超越七百萬億阿僧祇劫生死之罪。」
- (46) 『成唯識論述記』(大正四三・二四三・下)
- (47) 『成唯識論 卷第十』(大正三一・五九・上)
- (48) 『地蔵菩薩感應抄』二丁。
- (49) 『大乘大集地藏十輪經序品第一』(大正一三・七二二・上―中)「是地藏菩薩摩訶薩。具如是等無量無數不可思議殊勝功德。与諸眷属欲来至此。先現如是神通之相。世尊説是地藏菩薩諸功德已。爾時地藏菩薩摩訶薩。与八十百千那庾多頻跋羅菩薩、以神通力現声聞像。從南方来至仏前住。」
- (50) 『大乘大集地藏十輪經序品第二』(大正一三・七二三・上―中)
- (51) 『大乘大集地藏十輪經序品第二』(大正一三・七二八・上)
- (52) 『地蔵菩薩感應抄』二―四丁。
- (53) 出拠不明。あるいは趣意文か。
- (54) 出拠不明。あるいは趣意文か。
- (55) 藤原殖子が承久の乱の後、自分の罪の多いことに悩み、自分が地獄に墮ちることを恐れていたが、太子廟に参詣した際に地藏の功德を聴き、地藏像を作った話。
- (56) 「帝王任御意知食世事」において「禪定比丘尼七条女院」とあり、

貞慶と宗性の地藏菩薩信仰

また、殖子の子や孫である後鳥羽・順徳・土御門・雅成親王(六条宮)・頼仁親王(冷泉宮)が配流されたことに對して自らと彼らの滅罪と死後のことを地藏に祈る記事がある。その他の史料・先行研究において殖子が地藏像を立てたとの記載は管見の限り見つからなかった。

- (57) 『地蔵菩薩感應抄』七丁。
- (58) 源満仲の家臣で殺生を繰り返す者がいたが、狩りの途中にある地藏堂に立ち寄った。以下はその後、死に地獄に墮ちた時の話。
- (59) 「尸に非日」
- (60) 『地蔵菩薩感應抄』六丁。
- (61) 貞慶の『地藏講式』でしか見ない「苦域」という表現をしており、ここにも貞慶の影響が見られる。
- (62) 『地蔵菩薩感應抄』九丁。
- (63) 貞慶撰『発心講式』の奥書には、「但、依「世尊之恩」、受「慈氏之化於知足天上安養淨土院、且奉「仕弥陀」、慈尊一代之末、円寂双林之暮、永生「極楽」至「不退転」とある。安養淨土院とは弥勒のいる兜率天にある内院のことである。すなわち第一生を今生もしくは安養淨土院、第二生を安養淨土院もしくは円寂双林、第三生を円寂双林もしくは極楽にあてはめると、貞慶は三生等で極楽に往生する極速三生の論理を構築していたのである。この極速三生は法然の凡夫の即得往生を否定する中で、貞慶が三界を出る難を会通し、自らの凡人報土論を構築した理論であった。詳しくは楠淳澄『貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究…仏道篇』京都…法藏館、二〇一九年、一〇九―一一〇、四〇八―四一二頁参照。
- (64) 『地蔵菩薩感應抄』十一―十二丁。